

次の文章と、図書委員の野中さんがこの文章の本を紹介するために書いた【本の紹介カード】を読んで、あとの問いに答えなさい。

俺（神谷）は陸上部の四百メートルリレー（4継）のメンバー（リレメン）の一員である。全国レベルの実力をもつ一ノ瀬連は、大会前に足の肉離れを起こし、顧問の三輪先生から出場を止められたが、先生に内緒で練習を行っていた。今度の大会は部長の守屋にとって、負ければ引退試合となる試合である。

「先生、すみません」

謝ったのは、守屋さんの声。守屋さんが連の隣に来て、連の頭を無理やりぐいと押すようにして、二人で礼をした。

「先生、勘弁してください。言いつけを破ってすみません。無茶してすみません」

「おまえが謝ることア……」

言いかけた先生の言葉を守屋さんは遮った。

「部長として部員の管理が行き届きませんでした。俺がもつとこいつに言つて聞かせないといけませんでした」

連が何か言いたそうに守屋さんを見たが、構わずに続けた。

「どこかで俺自身が一ノ瀬に期待していたのかもしれない。こいつと走ることをあきらめきれなかったのかもしれない。俺にそんな気持ちがあつたとしても、一ノ瀬があきらめてくれるわけがないです。自分勝手でした。もし、こいつに何かあつたら……」

守屋さんは、その先までは言わずに唇をかみしめた。

連は黙って、守屋さんの横顔を見ていた。あきらめきれない無念そうな表情が、初めて連の顔に表れた。ずっと隠していた表情。心の内を連は決して顔には出さず、意固地に淡々と逆らい続けていた。一度、

【本の紹介カード】

チームのために……

このチームの仲間とともに、走りたい。

自分のためだけではなく、仲間のために……

大切に思うからこそ感じる苦しさ、辛さ、その先にあるチームの絆……

登場人物の心情が胸に迫る一冊です。



一瞬の風になれ
第二部—ヨウイ—
佐藤多佳子

悔しさをあからさまに表に出してしまつと、ゆっくりと少しずつ顔つきが変わつていった。連の中で何かがほどこけていくようだった。そうか……。俺はようやく理解した。守屋さんだ。守屋さんのために、連は走りたがっていた。4継という競技の魅力以上に、南関東という舞台の華やかさ以上に、連にとって大きなものがあつたんだ。

「俺たちに任せてくれ、一ノ瀬」

守屋さんはきつぱりと言つた。

「桃内、神谷、根岸、守屋、みんな、めいっばい走るよ」

めいっばい走ると大声で誓わないといけないのだが、声が出せなかった。泣きそうだった。根岸も、桃内もかたまつたように黙っていた。三輪先生は、口を一字に引き結んで、何度もまばたきをしていた。長く重い沈黙のあとで、「ハイ」やつと、連がそう言つた。

その時の連の目や声が、しばらく頭から離れなかつた。悔しさや悲しさをふつと越えたような素直な目と声だった。

（佐藤多佳子「一瞬の風になれ 第二部—ヨウイ—」による。）

